公条家集について

伊藤　敬*

要旨

三条西公条は、父の実隆の後をうけて、中世末十六世紀前半の歌会・文壇に活躍した紳縉である。彼の和歌を集録したものは、私家集伝本書目や国書総目録によると三十数種に及ぶ。筆者たまたま二本の家集を蔵することもあって、それらの書誌的な考察・整理を行なったのが本稿である。

公条の家集は、実隆の雪玉集のようには集大成されることなく、種々の写本として伝わった。内容上大別すると、類題集・定数歌集・両者の合集・単一の定数歌詠・他家集への混入歌詠になる。諸本を比較するに、内閣文庫蔵の一本と私蔵本との型が、唯一の全集と称しうるものである。そして諸本間の流布交流のあとは余りみられない。また、現存する定数歌の半ば以上の歌は、公条の二十代の歌（永正五年三歳—永正十三年二十歳）である。主として以上のようなことが判明した。

しかし、ここまでの作業は、まだ公条研究の緒でしかない。今後さらに調査研究が進められて、書目と解題の充実、定本の作製が果されねばならない。そして、公条や三条西三代を、中世末近世初期の文学史にいかに位置づけるかが、最終の課題となろう。

なお、公条の和歌ひいては室町後期の和歌を研究するための便を考え、私の蔵する一本を底本として翻刻紹介することにした。利用いただければ幸いである。

序

三条西公条（一四八七—一五六三）は、室町後期十六世紀前半の宮廷歌壇を代表する歌人である。後の江戸初期に、父の実隆（一四五五—一五三七）・冷泉政為（一四八六—一五六八）・後柏原院（一四六四—一五三六）ら三人の家集（雪玉集・碧玉集・柏玉集）が三玉集の名で称揚されたが、公条の場合もまた、飛鳥井雅俊（一四八六—一五三八）・姉小路済継（一四九〇—一五一八）の集とともに三家和歌集と称されている（書林宣英堂歌書目録による）。

歌の家に生まれ、古今伝授の道統を継いだ公条の歌人としての経歴は、主として実隆公記や再昌草にみることができるが、彼の歌界における地位を示す一例として、後柏原院御日次結題（永正六年九月九日以来の着到百首、続々群書類従第十四所収）と千首和歌太神宮法楽（天文十一年二月九・十日披講の十百首、群書類従第一六四）とをあげてみよう。

前者は、後柏原院以下十五人の廷臣によるものであるが、その官職・人名・年齢は次のとおりである。

前内大臣三条西実隆55・権大納言冷泉政為65・同小倉季種54・権中納言甘露寺元長54・同東坊城和長50・前権中納言田向重治59・参議高倉永宣46・同広橋守光39・同三条西公条23・同四辻公音29・同姉小路済継40・非参議冷泉為孝35・蔵人中山康親25・左少弁甘露寺伊長26・左少将飛鳥井雅綱21

後者には、後奈良院を始めとして二十人が参加しているが、その官職・人名・年齢・詠歌数は次のようになる（上位十人のみをあげる）。

後奈良院47歳（113首）・前内大臣公条56（77）・内大臣三条公頼45（65）・権大納言甘露寺伊長59（65）・同飛鳥井雅綱54（65）・伏見宮貞敦55（60）・権大納言三条西実世32（58）・同広橋兼秀37（50）・参議山科言継36（50）・権中納言中院通為26（46）

若くして禁裏御着到の数に入り（初めての参加は、永正五年である。実隆公記、家集）後には天皇に次ぐ詠歌数をみせていることを、他の廷臣と相対的に評価してみるとき、公条の歌人としての地位の高さを推定することができよう。あわせて父の実隆と子息の実世（実澄・実枝）の存在の重さもこの例にみえているのであって、実隆以下三条西三代の十五、六世紀における歌壇史上の存在が、看過しえないものとなっているのである。

公条は、後柏原院・後奈良院の世に廷臣としての忠誠を尽くし、遂に家として始めての右大臣にまで、異例の昇進をとげた（公卿補任に、不兼大将大臣転任例と注記されている）。特に後奈良院とは母方の従兄弟の関係にあり、その親王時代から御学問の師として仕えたこともあって、極めて親しい間柄であった。弘治三年（一五五七）、院の崩御にあたり、公条の慟哭した姿を、後奈良院御拾骨記（群書類従第五八）は次のように録している。

三条称名院、御骨待兼玉フ。般舟院方丈之縁立玉フ、御拾骨之論師御入時、御庭ニ馳向、御骨之桶ニトリツキ玉フ、御落涙、其時之御歌ニ

立ノホル煙ノアトノチリヲ□（ミカ）テサラノ泪ニ袖ソヌレケル

又

今マテニ残ルヲシラハ身ノ限リツカエンモノヲ墨染ノ袖

これもまた、当時の公条の姿を如実に示す興味深い逸話である。

紙幅の都合にて、詳しくは後日を期することとするが、中世末から近世へかけての三条西三代そして公条の、和歌史上・古今伝授や古典学上の事蹟は、さらに追求されねばならない。今はその一角として、公条家集についての考察をここに報告しようとした次第である。簡素ながら、以上を序の序とするものである。

公条の歌集や詠歌については、すでに福井久蔵氏の大日本歌書総覧と和歌文学大辞典の公条の項（伊地知鉄男氏筆）とに、それぞれ四種の写本が紹介され、群書類従所収のもの（後述）については、群書解題で解説がなされている。最近になって、私家集伝本書目（昭和四十年四月刊、以下単に書目という）と国書総目録（主として第四巻称名院の項、昭和四十一年八月刊、以下単に総目録という）が刊行され、重複を除くと三十数種の諸本の名称と所在が明らかにされるに至って、今後の公条研究に大いに裨益するところとなった。

しかし、これらの諸本は、類題集・定数歌集・他歌人の詠との合綴・類集に所収の作品というように、種々の形態のものである。また、未収録のものも存在する。書目や総目録は、名称と所在を示すことを主としたものであるから、内容・諸本間の関係等の書誌的解説は、今後の作業として残されていた。今それらについて十全の調査を終えてはいないが、実隆の研究を続け、たまたま公条の家集二本を蔵しているということもあって、一応の成果を以下に報告しておく。

これが公条、さらには中世和歌研究の一助ともなれば幸いである。未見の諸本も数種あるので、不備誤謬の点について御教示をいただければこれまた幸いである。

一、類題集について

実隆の和歌は、近世になって集大成され雪玉集十八冊（寛文十年一六七〇板）となった。（拙稿、三条西実隆と和歌・その二雪玉集のこと、国語国文研究第三〇号参照）しかし、生前に自らの手で編した家集はなかったようである。現在知られる限りでは、公条もまた家集をもたなかったようである。三条西三代への評価が高まった、智仁親王（一五九九—一六二九）後水尾院（一五九六—一六八〇）のころに実隆の歌の類編が行なわれたが、公条の歌もこのころから収集されて家集が生まれたと類推される。——雪玉集には永正期の歌が多い、公条家集もまたそうである（後述）。一つの証となろう。——その収集には二つの型がある。一つは部立て類題の集であり、一つは定数歌の集である。まず部立て類題集の形態のものについて述べてみよう。

福井氏が歌書総覧に掲げられた一本に、「称名院懐紙写」と名づけられたものがある。その懐紙写が示すように、禁裏月次御会を始めとする各種歌会での詠歌が懐紙や短冊として伝来し、それらが集められて一本となった。それらがやがて整理されて類題集となるのであるが、諸本を調べてみると、その間に三つの過程をみることができる。第一次の段階として、次のような一群がある。

A 1 称名院集　　書陵部（伏・九七）

27 称名院百首集　　内閣文庫（二二一・三一六）

10永正和歌集　　刈谷市立図書館（三・一三三五）

（注　各書名の上の番号は、記述の便宜上、私家集伝本書目468三条西公条の項に所収の三一種にその順に付したものである。以下これに従うので、書目と参照願いたい。）

1と27は同型の写本、10は相異するが、いずれも公条の定数歌を主として集めている（後述）。その中に99首の収集部がある（1、27は五番目、10は二番目に）。その99首は、杜五月雨・互恨絶恋・秋色・首夏・海辺郭公・遠村蚊遣火・竹風如雨・うらみ・あらし（以上、初めの十首の題）というように部立て類題によらず雑然と集められている。部立て別にすると、春14首・夏21・秋15・冬19・恋18・雑12で、夏と冬の歌が比較的多いという特徴がある。注記等はみられず、その出所出典は不明であるが、集められたままに写しあわされた形をみせているものである。

次の段階のものとして、春・夏と部立て別にはしたが、類題化されない形の集がある。

B3称名院詠并三光院詠　書陵部（五〇一・七九二）

右の写本がそれで、和歌文学大辞典の公条の項で解説されているものである。（注、巻頭歌題が趨年花珍となっているが趨年の誤りであろう。）巻頭歌によれば福井氏のいう称名院懐紙写なる一本が同じものと思われる。この本には、各部立名の下に、「題次第不同」と注記があり、春40首・夏34・秋24・冬24・恋36・雑141・追加20（春16・夏1・恋1・雑2）計319首が収められている、和歌文学大辞典で「百首歌を後年類聚したものか」としているが、夏や雑が比較的に多いことや雑における歌会名の注記（例、天文二年六月廿日聖廟法楽当座、庭松105、翻刻参照）などからみて、各種歌会への詠進歌が収録されたものであろう。ついでに言えば、三光院実枝の詠もまた題次第不同として収められ、それの成長したのに、井上宗雄氏蔵三光院集がある。公条の歌も実枝のも、同じころに家集として成立したようである。

第三の形として部立て類題の整ったものに次の四本がある。

C18公条公集　　浜口博章氏蔵

D9西三条称名院集　　内閣文庫（二〇一・一三三）

16公条家集　　伊藤　敬蔵

17称名院家集　　伊藤　敬蔵

C18は、春24首・夏5・秋11・冬4・恋9・雑2計55首を前半に収めるものであるが、それらは他の諸本の歌と一致しない点で貴重な写本であり別系のものである。早い時期のものと思われるが、編纂の由来等は未詳。それに対し9 16 17の三本は内容を同じくし、上巻もしくは前半が類題集、以下が定数歌集となっている。語句の異同からみると9と16が近く、17は差をもつ。ともに一千余首を集め、16によれば春175首・夏152・秋194・冬145・恋120・雑227となっている。

注　両者の差異は翻刻の解説参照。なおこのD型と同じものが、12称名院集京大本であることを、井上宗雄氏から教示をえた。大阪市大にも一本あるよしであるが（称名院右大臣公条公集、総目録に記載）、ともに未見のため叙述から省く。

このD型が、今までのところ最大の家集であり類題集であるが、所収歌をA、B型の写本と比較してみると、Aの99首中9首がBに、56首がDにはいり、Bの319首は全部Dにはいっている。（Cはいずれとも重ならないことは前述した。）このことから、AとCはBとDと直接の関係をもたないこと、Bはそれが成長したかあるいは有力な資料となってDになったことが証される。また、公条の歌が場所と時代を異にした何人かの人々により別々に編集されて流布したこと――定数歌集についても同じことが言えるのだが――が知られるのである。

ところで、このD型に至る集成がいつ誰れの手で行なわれたかについては、今のところ確たる手がかりはない。序で、後水尾院ころかとしたが、当時の三条西家歌学崇拝からみた推定でしかない。下限を示すものには次の証がある。

2称名院公条集（書陵部）は、D型の下巻定数歌集と同じものであるが、題簽に「千種有統卿筆」と書かれている。――ただし、統の字は糸偏は読めるが、旁は薄れて判読しがたくなっている。書目は有続としているが、公卿補任にその名はない。糸偏の人名を求めると有敬＝有統がある。総目録は有統としている。――この有統（享保二年一七一七非参議、元文三年一七三八薨）を信ずれば、そして下巻とともに上巻も成立していたとすれば、十八世紀の初めが下限となる。また、寛延四年（一七五一）重刻の草庵和歌集類題に付された書林宣英堂歌書目録中に、「三家和歌集類題」の名が見える。ここでいう三家とは、その紹介文にあ

るように、飛鳥井雅俊・姉小路済継そして公条のことである。この類題集は総目録にも見えず、未だ実物を手にしていないので所収歌は不明だが、年代からみてD型の写本を材料としているものと推定される。現在私の知り得たのはこの二例であるが、近世中期までの堂上歌壇において編集された（定数歌集も含めて）ものと推定しておきたい。

以上が部立て類題の集についての整理である。次に定数歌集の形のものについて述べてみよう。

二、定数歌集について

定数歌集も種々の形で伝わっているが、内容別に列記すれば次のようになる。

a 1 称名院集　書陵部（伏・97）
27 称名院百首集　内閣文庫（一〇一・三一六）
b 10 永正和歌集　刈谷市立（三・一六二五）
c 6 称名院詠草　尊経閣（一三・一七・大）
d 9 16 17 の下巻もしくは後半（前述）
2 称名院公条集　書陵部（伏169）
e 20 称名院百首　書陵部（五〇一・七六八）
f 21 百首和歌集成（実隆公条集）書陵部（一六五・二一〇五）

以上が公条の集と名づけられるものである。

その他は大別して次の三種にすることができる。

g　公条の定数歌を含む他人の集で、4道堅法師集（書陵部五〇一・七〇九）5道堅法師詠（書陵部五〇一・八三九）（注　書目には、それぞれ七ケ度、四ケ度とあるが、それらは、書目448道堅の十二、十三番の注記にもみられるように、すべて公条の詠ではない。公条は四ケ度、二ケ度のみである。道堅の場合も百首等七ケ度、同じく五ケ度とあるが、種々の唱和などを入れると、十七、九ケ度になる。訂正補筆を要する。）

h　百首歌一巻が単独に存するもの、19（書陵部）・24（尊経閣）・25（高松宮）の春日社法楽百首。三十首の30（書陵部）

i　類集に所収のもの、22片玉集前集（一一六）・23先代御便覧（一一八）・26賜芦拾葉（一三）・28点取類聚・29続群書類従（三八九）。合綴の31（書陵部）

これらaからiまでのものの定数歌を整理したのが次の表である。

No.	名称	詠出年次	巻頭歌題と初句	d	a	b	c	e	f	その他（g、h、iなど）
1	着到百首和歌	永正五年	都立春　たちそむる	1						
2	御着到百首和歌	永正六年	歳中立春天つ空		2		1			雪、内
3	詠百首和歌	（永正六？）	年内立春あら玉の		3		6			雪、続々群
4	詠百首和歌		（春廿首）吉野山		4		2			
5	詠百首和歌		立春風　むすひしも		5		6			
6	後奈良院御着到百首和歌（大永二以降）		立春　沖つ波		6		23			
7	着到百首和歌		立春　雪のうへも		7		26			伊
8	着到百首和歌	永正十年	立春　あさみとり		1		22			
9	春日社壇詠百首和歌	永正十年	（霞五首）夜あらしの		2		26			
10	親王御方御着到	永正十一年	立春　うちとくる		3		3			
11	禁裏御着到	永正十年	初春　けさも猶		4		7			
12	御着到		立春　天地に		5		3			
13	句題御百首	天文十一年	遙峰帯晩霞、朝霞				19			
21	詠三十首和歌	永正六年	待早鶯　朝日影		8		24			
22	三十首	永正十二年	江上霞　かすみ行		9		25			
23	三十首和歌	永正十年	早春鶯　うちとくる		10		東			
24	多武峰談山法楽三十首和歌	天文二、三年	連峰霞　きのふけふ		11					
25	詠三十首和歌	（天文十一？）	立春　出る日も		12					
26	詠三十首和歌	永正十二年	香具山立春雪なから		13					
27	二十首和歌	永正十二年	江上霞　朝ほらけ		14					
28	十首和歌	永正十年	処々立春行末に		15					
29	十首和歌	永正八年	嶺上霞　春の色に		16					
30	（七十賀贈答）	弘治三年	（為益との贈答各十首）		17					
31	六首夢庵追善（大永七以降）		夢　音になくも		18					
32	冬日陪北野社詠三十首和歌	大永四年	早春霞　四方の空		19					
33	（仲秋十首詠）		山月初昇河風に							
34	（漢詩七絶二首）		竹裏梅　梅花尤傲風		1					
35	太神宮法楽（十五首）		初鶯　たかきをは		6					
(36)	（雑集九十九首）		杜五月雨雲かかる		3					
					8					
					5					
					2					

(30)　(31)

注 a～f の欄の数字は定数歌の所収順。その他（g h i など）の欄の数字は書目の番号を示す

この表から、d型のものが最も歌数多く体裁も整っていることが知られる。それに次ぐのがe20の七百首とc6の五百五十首で、以下abfの順の歌数である。（d型については翻刻参照）また、漢詩や雑集を含む点で、abの型に古さを感ずる。さらに顕著なことは、d型の内容が他集と百首歌の一、二を除いてほとんど重ならない点である。類題集の場合と同じく、別々の場で編集され、それが流通しなかったことが注意される。

なお、書目にみられる以上の定数歌の他にも、さらに各所に存するものがある。管見にはいったものをあげると、彰考館の道堅家集（巳十）・内閣文庫の着到百首和歌（二〇一・三三七）・伊達文庫の明応五年以下の集・先代御便覧（書陵部）・版本雪玉集などがある。総目録には東大史料編纂所のものが掲げられているし、井上氏によれば、蓬左文庫の文明十四年御当座・彰考館の点取和歌にも公条の詠が収められているとのことである。これらも参考として一覧表にそれぞれの所蔵所の頭の文字を付記した。

次に、各定数歌について知りえたことを注記しておく。（以下のゴシック数字は一覧表の歌順に付したものである。）

1 2 7は、誤って雪玉集巻十六に収められている。（注、拙稿、雪玉集定数歌考、苫小牧高専紀要創刊号昭和四十一年三月、参照）**1**は、内閣文庫の着到百首和歌（二〇一・三三七）と同じで、その奥書に「此一帖逍遙院殿薨空御詠也」とある所伝に従って誤られたように、**2 7**も実隆のものか公条のものか不明のままに雪玉集の異本として伝来したらしい。**1**の永正五年の着到には、実隆は加わらず、公条にとって最初の禁裏着到であったことが、実隆公記や再昌草にみえている。

2は続々群書類従第十四に活字化されている。この永正六年の御着到はよく流布している。静嘉堂・内閣・伊達・刈谷・彰考館等に抜書きもしくは全部の形の伝本がある。実隆の詠は雪玉集巻八に所収。

3は、表にみえるごとく写本が多いが、詠出年次も合点者名も記載がない。官名が太宰権帥となっているのによれば、永正十一年から天文四年までのものとなる。ところが、同題の実隆の百首が雪玉集巻八の4にある。実隆公記によると、それは永正六年十一月一日の庚申に、公条と公順との三人で詠じた一夜百首である。**1 2**が永正五、六年のものであり、雪玉集巻八のが永正六年の同時の実隆の着到百首であることからみて、あるいはこの庚申一夜百首かと思われる。合点者については、樋口芳麻呂氏所蔵の点取和歌類聚（二本）所収のものにそれぞれ、「薨空」「実隆卿点也」と記載されていることを御教示いただいた。実隆として誤りはないと思われる。

4から**7**までと**12**は詠出年次未詳。

8は永正十年重陽以来親王御方着到百首。

9は永正十年二月の詠。春日祭上卿として南都へ下向の際奉納したもの。

10は永正十一年三月三日以来の親王御方での着到。

11は、書目20の写本によると永正十年とある。再昌草に、三月三日以来禁裏御着到のことが記されている。この時のものだろう。

13は、続群書類従（第三九）に活字化されている。官位からみて天文十一年冬の成立と群書解題はしている。時の上卿は勧修寺伊豊（公条の母方の従兄弟の子にあたる）としているが、公卿補任では実世（時に三十二歳）となっている。どちらにせよ縁ある間なので、その参向に託したものであろう。

三十首以下については紙面の都合にて省略する。作られた年は一覧表に示しておいた。

この節の最後に、次のことを注意しておきたい。それは、これら定数歌の多くが、後柏原院の永正年間のものであるということである。総歌数一五九一首のうち、永正五年から永正十二年（公条三十三歳から三十九歳まで）までのものが八六〇首、54％に及ぶ。実隆の場合も永正期の比率が高い（前掲、雪玉集に関する拙稿参照）。後柏原院の永正期（一五〇四—一五二〇）は、前代の後土御門院期の連歌隆盛期が下火となって、和漢や聯句がはやり、和歌の産出もまた盛んとなった時期である。この辺に答の一つが考えられるが、他にこの期の作品が残存したという外的事情があったかもしれない。一つの課題としてあげておきたいことである。

以上で、書目にみられる伝本を主とした諸本の整理が大体ついたわけである。最後に書目の補訂の意味で、書目所収の諸本を並べかえて掲げてみよう。

（番号の（）は未見のための推定を示す。）

一、類題のみの家集。

3　称名院詠　　書陵部（五〇一・七八）

18　公条公集　浜口博章
(8)　称名院集　高松宮（ほ・二一〇）

二、類題（雑集を含む）と定数歌の家集。

1　称名院集（27と同じ）　書陵部（伏・九七）
10　永正和歌集　刈谷市立（三・一八二五）
27　称名院百首集（1と同じ）　内閣文庫（二〇一・一八二五）
9　西三条称名院集　内閣文庫（二〇一・四七三）
16　公条家集　伊藤　敬
17　称名院歌集（9、16と同じ）　伊藤　敬
(8)　称名院集　高松宮（ほ・二一〇）
(12)　称名院集　京大（四・三・シ・一九）

三、定数歌のみの家集

2　称名院公条集　書陵部（伏・一六九）
6　称名院詠草　尊経閣（一三・一七・六）
20　称名院百首　書陵部（五〇一・七六八）
21　百首和歌集成（実隆公条集）　書陵部（二六五・二一〇五）

四、単一の定数歌

19　称名院右大臣百首（春日社壇詠）　書陵部（五〇一・三七〇）
24　春日陪春日社詠百首和歌　尊経閣（七七・古）
25　称名院百首　春日社法楽　高松宮（貴・五一）
30　称名院右大臣卅首　書陵部（五〇一・三五二）
22　公条公百首（片玉集前集二六）　書陵部（四五八・一）
23　百首詠（先代御便覧二八）　書陵部（二六五・二一三）
26　称名院公条公百首（賜芦拾葉一三）　内閣文庫（二一七・二一）
28　詠百首和歌（点取類聚）　樋口芳麻呂
29　称名院殿句題御百首（続群書類従三八九）
31　北野社詠三十首和歌（後崇光院御詠に合綴）　書陵部（伏・一八一）

五、他の家集に混入の定数歌

4　道堅法師集　四ヶ度　書陵部（五〇一・七〇九）
5　道堅法師詠　二ヶ度　書陵部（五〇一・八三九）

その他、11の称名院和作（神宮文庫文・二三四）を閲覧したが、公条のものとの証を見いだせなかった。また、7、13、14、15は閲覧できなかったので省いた。以上で書目に収載の三十一種となるが、総目録にはこれらの他に、次の五種を加えている。

称名院右大臣公条公集　大阪市立大森文庫
称名院殿懐紙　教育大（東京）
称名院詠　東大史料編纂所
称名院三百首（21のうちの三百首）　〃　〃
称名院和歌　〃　〃

前に述べた未収録のものとあわせて、未調査のものはまだまだ多い。閲覧できたものについても、時間の制約のため、見過し見誤りが多いことと思う。今後更に正確を期し、より完全な書目と解説ができるようにと願っている。

三、散在歌について

これまで触れた伝本以外に、種々の歌書や紀行等の中に拾える公条の歌がある。かえって見聞の浅さを披露することになるが、今後の研究のための参考として付録の形で列記しておく。

1.　千首和歌太神宮法楽　群書類従一六九、77首
類題集D型に、76首―うち二首は内大臣の署名―所収。3首は写本にない。

2.　御会和歌恋五十首　大永二年八月四日　続群書類従四〇〇、5首
（写本に、内閣文庫二〇一・一三九がある。）

3.　君臣和歌　書陵部（五〇一・六一）20首
（後土御門11首、後柏原51、後奈良12、邦高15、貞敦26、実隆64、公条20実枝20、計219首を収む。後柏原、三条西三代の歌数からみて興味深い写本である。成立については未詳。）

4.　歌合（大永初年か）　書陵部（五〇一・六〇一）2首
（図書寮典籍解題続文学編による。）

5.　内裏月次御会懐紙写　内閣文庫（二〇一・一三八）3首
（大永年間十一月廿日の月次御会歌である。）

6.　禁裏御月次御会歌　書陵部（二六五・二一三）（3首か）

（先代御便覧第六冊所収、天文六年七月二十四日。同書目録―和歌文学研究第十三号―による。）

7. 再昌草（養徳社刊）　5首

（実隆との贈答などの歌。他に漢詩がある。）

8. 吉野詣記　群書類従三八　43首

9. 三塔巡礼記　〃　四八一　21首

10. 石山月見記　〃　四八一　15首

11. 後奈良院御拾骨記　〃　五一八　1首

13. 称名院右府七十賀記　〃　五三〇　12首

（為益との贈答、計20首は、D型写本に収載されている。）

14. 永禄五年一乗谷曲水宴詩歌の序　続群書類従四三一　1首

終　り　に

不備疎漏多く、草稿に過ぎないものであるが、公条研究への一つの足がかりを提供する意味で、あえて報告してみた。また、公条自身に関する論考も一緒に発表する予定であったが、公条家集の翻刻を優先させたために後の機会を待つことになってしまい、書誌的なことだけにとどまったことについて御了承を得たい。

今回の調査において、書陵部の橋本不美男氏、立教大の井上宗雄氏、愛知大の樋口芳麻呂氏、甲南大の浜口博章氏、尊経閣の今井吉之助氏、神宮文庫、刈谷市立図書館、内閣文庫の職員の方々からの多大な御好意にあずかった。ここに録して深くお礼申しあげる。

＊助教授　一般教科

昭和四十一年十二月十四日受理